

正倉院宝物特別調査

動物由来素材（牙甲角）の成果報告によせて

飯田 剛彦

正倉院には、象牙や骨、角、甲羅といった動物由来の素材を利用した宝物が多数伝存する。これらは、昭和23～26年（1948～1951）の第一次薬物調査、昭和28～30年の総合的材質調査の検討対象となり、材質の同定が試みられた。また、昭和61～62年の海ガメ類材質、平成8～9年の鳥の羽毛と文様の特別調査でも、それぞれの対象に検討が加えられた。

総合的材質調査からほぼ70年が経過し、この間、動物学、古脊椎動物学、動物考古学などでは新たな知見が蓄積され、また、分析手法や機器も著しく発展した。これらを利用しつつ調査を実施することで、大きな成果が期待できるようになった。近年、皮革、毛など、正倉院宝物中の動物由来の素材に関して、最新の知見や科学分析の手法を駆使した特別調査を行っており（それぞれ平成14～16年、同21～24年）、同じく動物由来素材として重要な位置を占める「牙甲角」についても、調査実施の機運が正倉院事務所内で高まった。

上記の状況を踏まえ、正倉院事務所では、令和3年から5年にかけて、秋季定例開封中の特別調査として、宝物中の「牙甲角」を対象とし、網羅的に検討を加えることとした。今回の調査では、前回検討の及ばなかった対象の調査や、従来の理解の再確認を行うと共に、より詳細な動物種の究明、採取部位の特定、加工法や利用法の特質解明などに力点を置いた。また、非接触による三次元データの取得など、基礎情報の蓄積にも努めた。

調査員は、滋賀県立琵琶湖博物館の高橋啓一氏（古脊椎動物学）、名古屋大学博物館の新美倫子氏（動物考古学）、国立科学博物館の川田伸一郎氏（哺乳類分類学）、奈良文化財研究所の山崎健氏（動物考古学）、同じく山口欧志氏（考古学）の各氏に委嘱した。高橋氏は象牙や化石、新美氏と山崎氏は骨・角製品や動物素材の利用方法、川田氏は哺乳類の骨格の形態、山口氏は三次元データ取得など、それぞれの専門分野の観点を軸として調査に加わっていただいた。なお、虹龍（南倉174）の年代測定について東京大学総合研究博物館の米田穰氏に、鳥類の骨の詳細調査について北海道大学総合博物館の江田真毅氏に、それぞれ依頼して実施いただいた。

紀要本号には、調査員全員の調査所見を集約した本報告を収載し、個別の成果として、虹龍の年代測定にまつわる米田氏の論考、正倉院では新規の導入となった、写真測量に基づく三次元計測法にまつわる山口氏の論考を加えた。なお、成果のとりまとめにあたっては、調査員の山崎氏に多くの労をお取りいただいた。調査期間中から報告書作成を念頭に置いて正倉院事務所の調査担当者と密接な連絡を取りつつ、過不足ないデータ収集、解決すべき課題の抽出と検討にご尽力いただいた。